

岡崎城跡坂谷曲輪発掘調査 現地公開説明資料（R3.3.6・7）

岡崎市教育委員会

【調査経緯】：岡崎市教育委員会では「岡崎城跡整備基本計画―平成 28 年度改訂版―」（H29.3）に基づき、岡崎城跡の整備を検討するための基礎となる岡崎城の城郭遺構について、積極的に調査研究を進めている。この調査研究の一環として、今回岡崎城跡坂谷曲輪の発掘調査を実施している。

【坂谷曲輪の概要】

- 坂谷曲輪は本丸と二の丸の西側に位置し、南北に細長い曲輪。本丸や二の丸よりも標高が一段低い曲輪。
- 坂谷曲輪の西側は水堀を隔てて白山曲輪があり、絵図によればこの堀を望む坂谷曲輪の縁辺には土堀が築かれていた。また土堀から堀へ降る法面裾部には水堀に面して腰巻石垣が築かれていた。
- 坂谷曲輪の出入口としては、天守のほぼ真西にあたる位置に坂谷門がある。坂谷門は枡形(四角形の小さな広場)を構成し、さらに枡形の外側には土橋で結ばれる丸馬出しも備えた嚴重な虎口(曲輪の出入口)を形成していた。
- 坂谷門は城東の大手門に対して裏口(搦手口)にあたることから搦手門とも呼ばれ、関ヶ原の戦い後に城主となった本多氏により豊臣氏を睨み城西の防衛拠点するために構築された。
- 絵図によれば枡形の前後に門が設けられていた。本丸から見て外側の門(外門)が高麗門で、内側の門(内門)が門の上部に櫓が載る櫓門という構造が想定される。
- 枡形の外門と内門は正対するのではなく、外門に対して内門がやや南側にずれた位置に開口するため、枡形内部を通過するには直進ではなくやや斜行する必要がある。
- 坂谷曲輪西側の堀は明治時代末期から大正時代初期に行われた伊賀川改修工事により伊賀川流路として改変を受け白山曲輪側には堤防が築かれた。



図 1 岡崎城郭図と調査地点

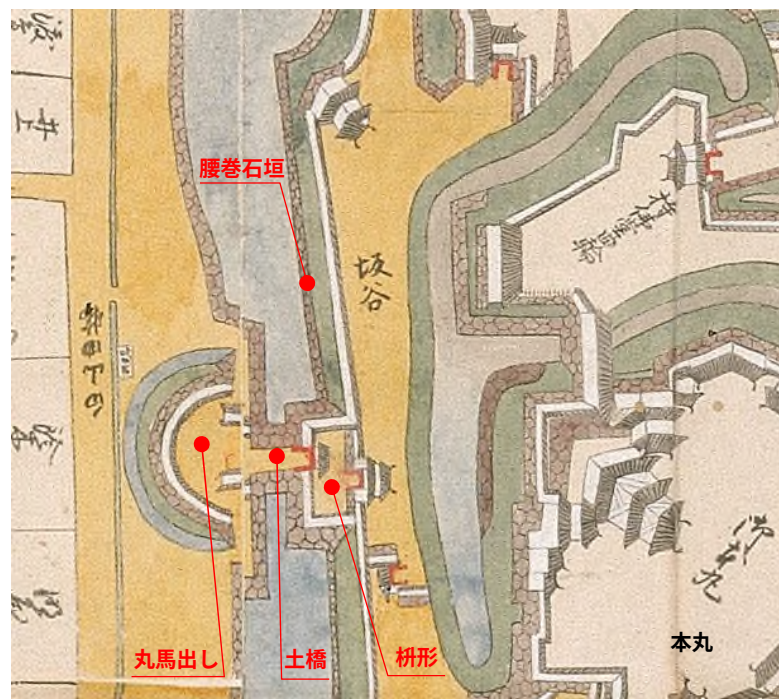


図 2 坂谷曲輪周辺の絵図

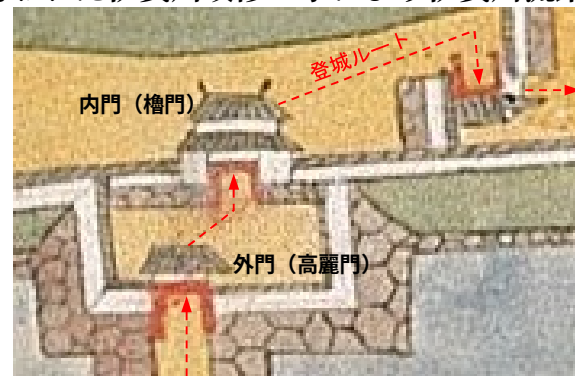


図 3 枡形拡大部（90度回転）

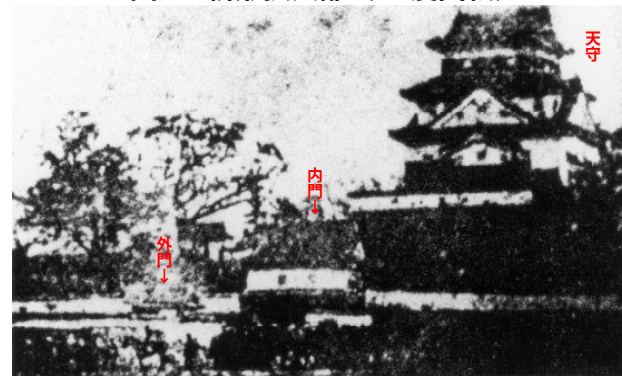


写真 1 古写真（西方から天守をみる）

【調査目的とトレンチ配置】

- 現在残る石垣は枡形を構成する石垣と想定されるが、枡形から先の土橋や丸馬出し、堀に面する腰巻石垣が残存しているのかは現状では不明。
- 枡形門は古写真に映ることから明治初年頃までは存在していたが、明治 6 年(1873) 前後(いわゆる廃城令前後)に取り壊されたものと考えられる。
- 坂谷曲輪西側の縁辺部には土堀の基礎と思われる石列や石組溝の一部が認められるが、部分的であり詳細は不明。
- 発掘調査では主に以下の点を確認することを目的とする。
 - ①枡形門(外門・内門)の痕跡の確認。→T1・6
 - ②枡形内部の構造の確認。→T1・6
 - ③坂谷曲輪裾部の腰巻石垣の確認。→T2
 - ④坂谷曲輪縁辺部の土堀や石組溝の確認。→T3・4・5

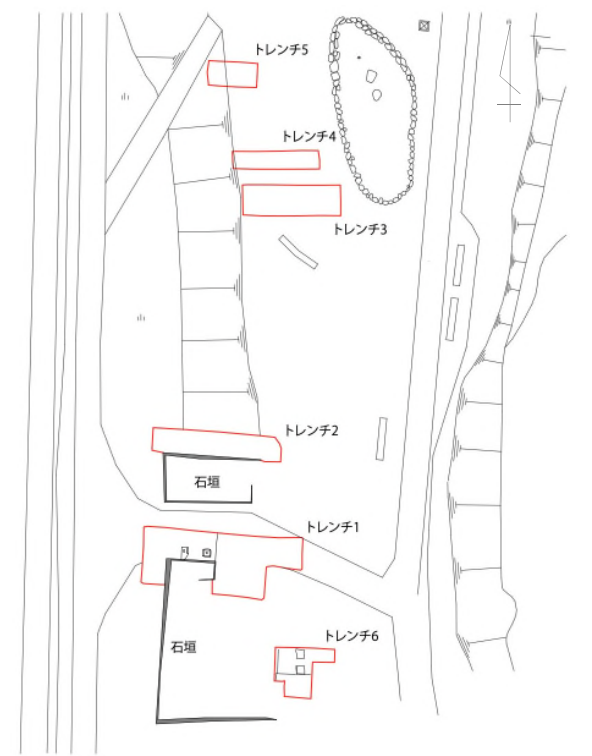


図 4 発掘調査トレンチ配置図（縮尺任意）

【発掘調査の成果】 ※トレンチ 1→6→2→3・4・5 の順で記載

【トレンチ 1】

- 枡形の外門(高麗門)の礎石を 2 基確認した。外門の南側の礎石で、鏡柱と控柱の礎石にあたる。
- 礎石上面に残る加工痕跡から推測される柱材の断面形状は両柱とも方形で、寸法は鏡柱が 27cm×42cm、控柱が 30cm 四方と考えられる。
- 礎石の中心には柱材を受けるホゾ穴があり、鏡柱は方形、控柱は円形を呈する。礎石の芯々間の距離は 1.86m を測る。
- 外門をくぐってすぐに石段が設置されており、蹴上(段差)は 10 cm 程度と想定される。
- 石段より先の枡形内の地面は 4 度前後の勾配で内門に向かいごく緩やかに登り傾斜となる。
- 書上文書(明和 7 年・1770)には「坂谷多門外冠木門 横内法一間三尺、男柱より扣柱迄一間、くゞり扉にあり」とあり、鏡柱と控柱の長さ 1 間は調査データともほぼ合致する。今回の調査区外ではあるが、横内法(間口)の 1 間 3 尺(約 2.7m)の位置にも礎石が残っている可能性が高い。
- 外門より先の土橋は削平され、伊賀川改修時に構築されたものと考えられる石垣を検出。ただし、枡形石垣下層部に食い込む大型の石材は土橋石垣の一部である可能性がある。



写真 2 トレンチ 1 全景（北東から）



写真 3 トレンチ 1 全景（北西から）



写真4 外門礎石、石段検出状況（上空から）



参考写真① 岡崎城からの移築と伝わる善立寺山門（高麗門）

【トレンチ6】

- ・枅形の内門（櫓門）の礎石を2基確認した。内門南側の礎石で、鏡柱と脇柱の礎石にあたる。
- ・脇柱礎石の南側には櫓門脇石垣の基底部が確認された。
- ・書上文書（同前）には「坂谷多門両脇石垣高サ一間一尺五寸づつ」と記され、本来の石垣の高さは約2.3mであったことがわかる。門の建物規模に関する記載はないことから、今後の発掘調査により残る礎石を確認できれば門の正確な規模が明らかになるものと考えられる。
- ・内門手前には石段が設置されており、蹴上（段差）は10 cm程度と想定される。
- ・内門手前の石段と外門直後の石段の天端レベルを比較すると内門側の地面の方が高く、その差は約50cmを測る。枅形内の地面が外門側から4度勾配で登ると内門手前の石段（蹴上10cmを含め）で高低差は解消されることから、枅形内にこれ以外の石段はなかったものと想定される。



写真5 トレンチ6全景（北西から）



参考写真② 岡崎公園入場門

※資料に基づく復元ではありません。

【トレンチ2】

- ・坂谷曲輪西側の堀に面する腰巻石垣は確認されず、さらに下層に存在する可能性がある。
- ・堀へ向かう斜面地は瓦が出土する層が続くため、本来の法面であるかは判別できない。
- ・腰巻石垣よりも手前（伊賀川寄り）で近代の伊賀川改修時に構築されたと考えられる護岸石垣が2条検出された。間知石積み（均一な四角錐の石材を谷積みした石垣）であり、城内にも同様の石積みが散見される。城郭石垣ではないことは明らかで、伊賀川護岸や近代の公園整備で採用された石積みであることがわかる。

【トレンチ3・4・5】

- ・トレンチ3では現地表面に石組溝が露出していたが、トレンチ4へは続かなかった。
- ・トレンチ4では現地表面に土塀基礎の石材が露出していたが、トレンチ3へは続かなかった。
- ・トレンチ5では石組溝も土塀基礎石も確認されなかった。
- ・いずれのトレンチも現地表面と江戸時代の地表面に差がないことが想定されることから、近代の公園整備等により石組溝や土塀基礎石が抜き取られた可能性が高い。
- ・いずれのトレンチも西側では曲輪西側の堀（現伊賀川）に落ち込む斜面が確認されたが、傾斜は現在の斜面よりも急であることから伊賀川改修時等に土砂が嵩上げされた可能性がある。



写真6 トレンチ2全景（北西から）



写真7 トレンチ3～5全景（北から）

【枅形の想定配置と今後の課題】

- ・枅形の外門、内門の礎石が確認されたことで、文献に記載の無い情報も多く得ることができた（石段の存在、柱材の寸法、枅形内の勾配など）。
- ・門礎石、石段、櫓門脇石垣等の配置が明らかになったことで、枅形規模（空間の広さ）についても想定が可能となった。
- ・今後は以下の点が課題としてあげられる。
 - ①残る礎石の確認。門構造の確定。
 - ②内門（櫓門）脇石垣の範囲の確認。
 - ③枅形石垣上部の土塀の痕跡の確認。
 - ④枅形内から土塀へと上がる階段の有無の確認。
 - ⑤曲輪裾部の腰巻石垣の確認。

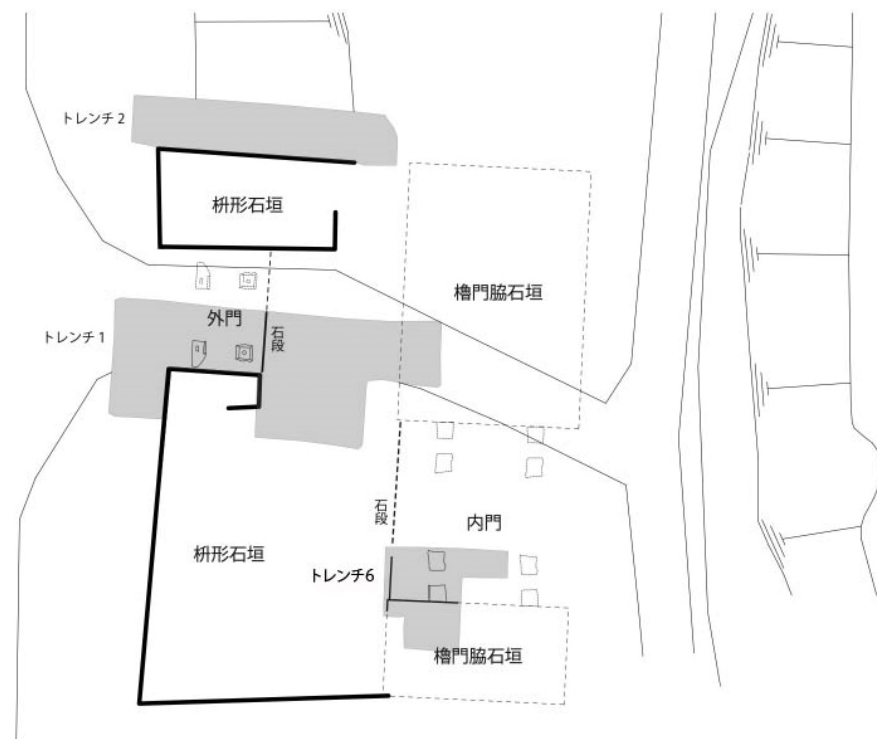


図5 枅形想定配置図

外門は書上文書により規模が想定できる。内門は石垣の高さ以外の記述はないため、門の規模（間数など）の想定はできず、推測の域を出ない。枅形の奥行は約5mと狭く、枅形内の空間は比較的小規模といえる。